

# 論 者 有 記



編集委員 高橋 真理子

## 認知症への対応 抗精神病薬に頼るな

認知症と診断された人が飲む薬には、いくつか種類がある。病気の進行を遅らせるのが「抗認知症薬」、不安や興奮を鎮める目的で出るのが「抗精神病薬」、そして「よく眠れない」という訴えがあれば睡眠薬や抗不安薬が処方される。

いま、世界では「抗精神病薬を減らす」ことを目指して認知症への対応の大変革が起きている。それが、1月末に東京で開かれた「認知症国家战略に関する国際政策シンポジウム」(東京都医学総合研究所主催)で明確になった。たとえばフランスは、2007年秋の委員会報告を受けてサルコジ大統領が「プラン・アルツハイマー」を策定。08年からの5年間に研究と医療にそれぞれ2億円、ケアに12億円を投じ、全国規模でさまざまな改革を進めている。

患者と介護者のQOL(生活の質)をもとに高めるのが目標だ。そして、患者のQOLを測る指標としては「抗精神病薬が使われていない」ことを見る。

抗精神病薬は、不安や興奮が激しいときに使われる。たとえ認知症でも、生活に満足していれば強い不安は出ないし、興奮状態にもならない。環境とケアが良ければ本人は穏やかに暮らし、抗精神病薬の出番はぐっと減る。

フランスでは、認知症患者での使用率が07年の16・9%から11年の15・4%へ着実に下がってきた。

英国での減少ぶりはいまもっと劇的だ。全国の医療機関を対象にした監査結果は、06年の17・1%から11年の6・8%へ激減している。「認知症への抗精神病薬の効果は限定的なのに副作用で1%程度が死

ぬ」という報告書が出たことが大きく影響したという。

オーストラリア、デンマーク、オランダとシンポジウムで発表したどの国も「抗精神病薬に頼らないケアを目指していた。見事に同じ方向だった」と、事務局を務めた西田淳志・東京都医学総合研究所主任研究員はいう。

では日本はというと、そもそも薬がどれだけ使われているかのデータがない。「どんな薬を使うかは医者裁量」という意識が強く、実態調査ができないと言われる。

亡父を介護したとき見知ったことからいえば、日本で抗精神病薬が使われ過ぎていないのは間違いないと思う。まずは各国と同等の実態調査をしてほしい。そして、認知症の人に抗精神病薬を使わなくて済む医療とケアを「各国に負けずに日本も」と強く願う。